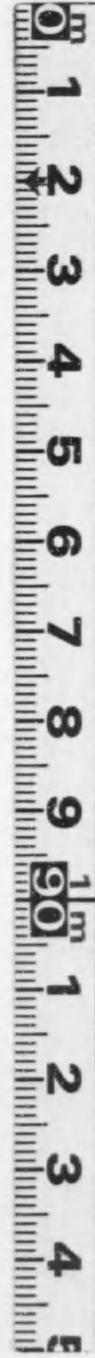
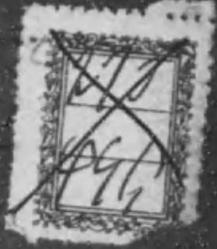


特116

709

觀世流改訂法本

竹山
朝長
阿漕
拾



始



特116

709

竹生島

朝長

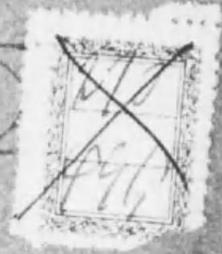
姨捨

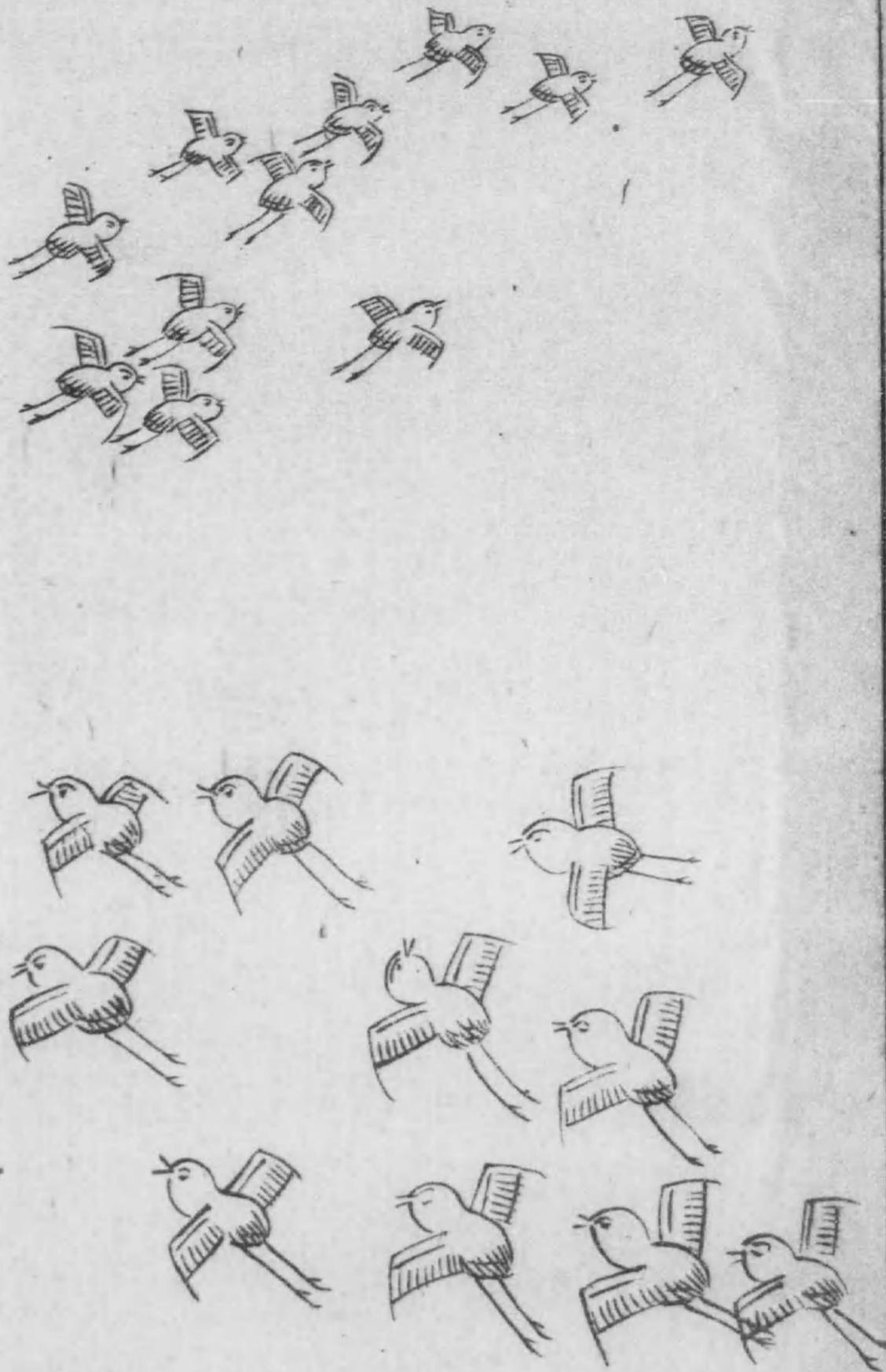
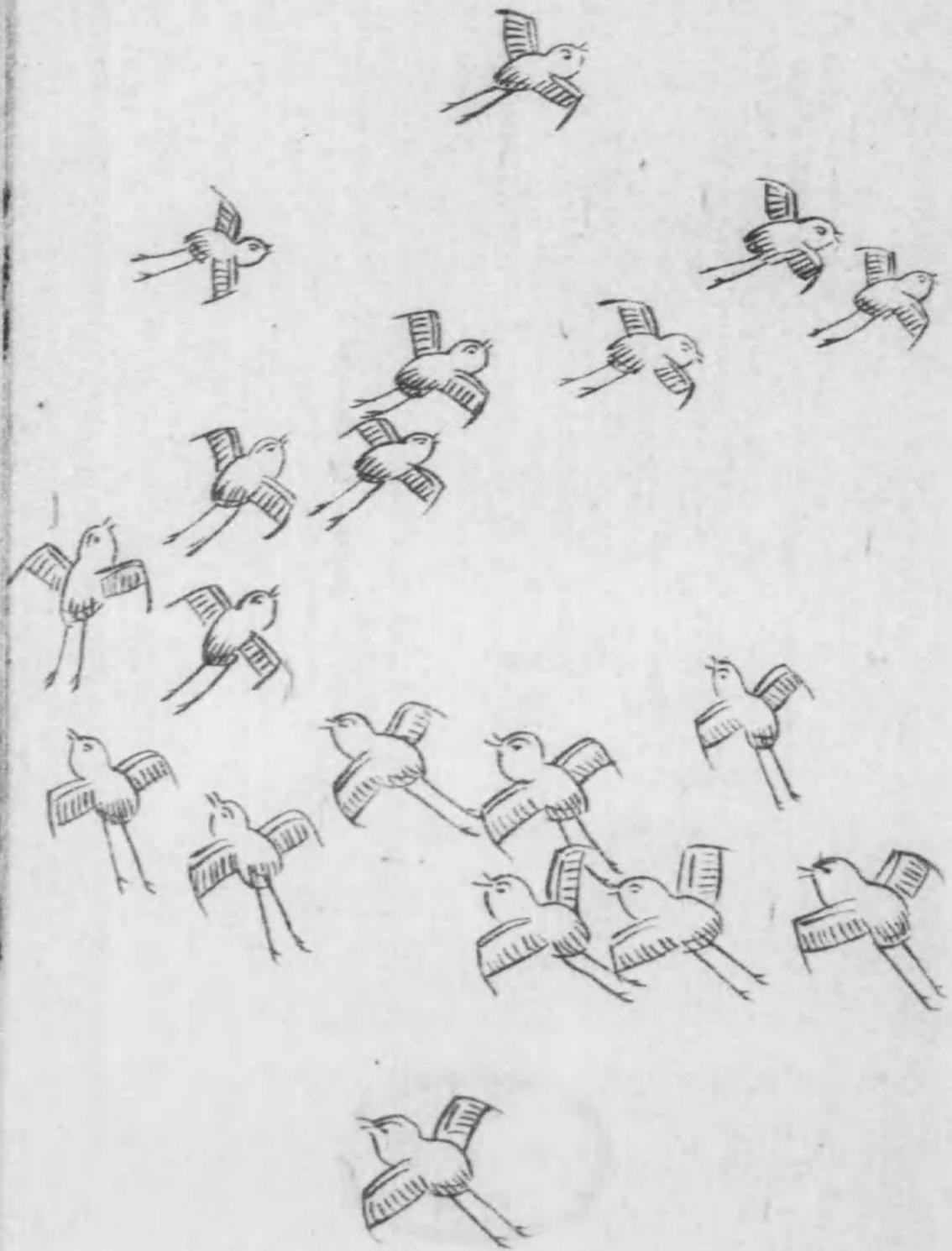
拍崎

阿漕

觀世流改訂謄本

丙六







觀世
清之
長之



文學博士

明治四十年

井上頼國 本本文監修
丸岡桂本 文訂正
親世清之節 附訂正

大正五年

丸岡桂 辭解并補訂
山崎樂堂 拍子附訂正
觀世流政司本刊行會 節附様式統一

大正十一年

山崎樂堂 拍子附再訂正

竹生島

解題

官人竹生時に請て、奇持を拜する事を作あり、明和の二百十番謡月録に全春洋竹の作と記せしむるに據り、と云ふ無し。

能之變式

前附の服能に定せらるる時はシテの出に「釣の當ふいつまでか疎も波間に明け暮れん」といふ句ありてサシに續く。總じて常より位重し。

謡ひ方梗概

服能として輕き方を。重くは却て宜しからず。前附の初を序に、半より破に、後段を息に讀みこし、シテ

に少く抑へて讀み、サシは稍さらりと朗かなるをこし、一聲にて位を少く大らかに取り、寛りと節運びにて、晴れ々と讀み行く。ワキとの同答は老人たれば靜に落着きとありべき也。さまで位取るに及ばず。「船が着いては」以下の詞は、神前に奉る處をれば前の詞とは心持を變へ、殊勝にして稍確りとありが宜し。後には「本より衆生」云々の一節、ツレ、前段一人にて讀み處はシテより、高き輕めにと地よりゆるめに位を取り、健やかに讀み。ツレ、同答の處は凡てシテに從ひて讀み。後には服能の天女をればさうりと讀み中、ワキ、素直にては一人、力有りてさらり、地、名こそさ、波や云、にも確りと大きな處あり。ワキ、りと讀み無く讀みと看とす。地、は出の高くなるやうに讀みこし、魚本に上る云々の地はシテの氣を承けて健かに且つ朗かに讀み。辨才天は女舞にせし云々はさうりとあり、クセにて前より少く續めて出、漸次運びをつけて讀み行くやうに、クセ止メは申入なればお末に流れぬやうにすべし。後には龍神物をれば總じてこせくすを讀み、大きく健やか、に讀み無く讀みと看とす。此心得にて「海殿頻に」以下さらりと讀み、「其時虚空に」云々は餘り早めず、夜遊の舞樂としよう少く位を進め、以下キリへかけて好く乗つて讀みこし。

辭解

竹に生るる鷺、竹生島の名に因みていふ。高葉集に「竹の林に鷺を鳴くも」、八雲海抄に「鷺の葉はをそは竹たぐり」と見えたりは鷺といひかけたなり。

竹生島

近江の國琵琶湖上にある岩嶼。島内に竹生島神社、竹生島、延喜、醍醐天皇の年号。天下

明神

竹生島神社の祭神。淡井稚命を祀ると傳ふ。四の宮や云、四の宮は山城國宇治郡山科村の一部落。鴨長明の道記

に「延喜寺第四宮(重明親王)此所にまゝにまき殿に、此廟のあたりを四宮河原といふなり」。伊勢物語に「山階のせんじのふく(仁明天皇早御子)その山科の宮に龍宮一水はしらせなむとしておもしろく作らむとらふ又山州名跡志に「山科御内に一、二、三、四の宮あり。當社(諸明神社)其茅四なる殿に号し之」と見ゆ。延喜寺第四宮の宮址なりといふ説當れりが如し。昔は樺川南に流れるたりと云ふ。河原の宮居」といふも其河原今はなかり。此所には河原の語を承けて

名も走井 松平子に「逢坂は胸のふ常に走り井の見附く人や末の水流早きを「末早き」といへり。あらむと思へば、後拾遺集に「石山よりかへり侍りける通にはしり井にて清水を泳み侍りけり」と訓書して「逢坂の關とはきけと走井の」と云ふことあり。墨云ら走井は上井の意にて之を國有の名とする事いはれなむし。名も走りと後けたりは有名なることあり。墨云らぬ 水に映れる月の墨云らぬを

逢坂の關の宮居 聖代に「逢坂と掛く。逢坂は近江國滋賀郡に在り。關の本紀に見ゆ。「關の宮居」は鴨長明の無名抄に「會坂の關 山越 京都北山より登りて如急 鳩の浦の明神と申すは、昔の輝丸なり」とあるをいへるなりと云ふ。物憂き世渡り。船の縁 湖味。便形 形に便東。彌生 二月の うら、うら、うら。うきわさ 世の中を伝ひくづ 魚。數をつくして 云。魚をとれるだけとて我が身一人の生計 佗び人 つい渡らん。ひまも浪間 暇無きを浪 同じわざながら 云。同じく漁業を営むにても罷 浦山かけて 浦から山へと。志賀の都 天智、弘文兩帝の都。今の 花園 天智帝の時に造ら 昔ながらの山階 千載に「さむ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山階か」とあるに由る。昔 眞野の入江 云。新境古今ながらは昔の儘との意に長等山を掛く。此山は三井寺の西方に在る。昔 眞野の入口 云。新境古今は眞野の浦波はるなり」と云々とあり。入江は右眞野村の地に在りしは今埋れて田地となれり。「よばひは舟を呼びの延喜。さーよせ 佛が津土に導かんとて衆生 誓願を舟に譬へたる語。神慮も 云。神の思はくも如何 迎への舟 佛が津土に導かんとて衆生 法を救ひて彼岸に渡す。力 兼りしに掛けて、法力 名こそささなむや 舟の意。さ、浪といへとも名のみにて風をければ浪もまたその功徳なるを述ぶ。

美ともありて古くは湖色の地名なりしを、後に滋賀の枕詞に採用したる語。國は近江の 云。國の名も江に近きといふを湖 降りか 云。今降りれそれとも冬より残れる雪 時知らぬ 云。伊勢物語に「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのかまたらかといひて下旬へ降り。雪の降りたることあり。常に雪の降りつみを時節に關係なき富士山を都の富士の 稱ある比叡山に引きあていふ。さへかへる 再び寒くなり返る事。春なれど比叡の雪を見て斯く思ひつけたる心。比叡のね 近江滋賀郡に在りて 雲居のよそに 云。子載集に「知らざりき雲井のよそに見し月の影を袂に宿いふ。こゝには旅の習われれば都人も都の人も同船して知り合にならるの意。なれ衣 着馴れたる衣。親 浦を隔て 衣の縁にて裏のいふ。浦より 緑樹影沈んで 云。僧海國の撰撰腐談に「緑樹影沈んで木 月浮海上 兜弁流その陽りとなり。幽邃みよし。此詩は尤唯幽の韻にて、弘法の作たり。弁流を 弁才天 別に辨才天ありて此相多は、流曲作者の考考となりしと思はる。源平感表記に「天女と申すは即大辨才功德天女是なり(中略)能美妙の音楽を調ぶ。左の管を斜ては三昧の琵琶を懐き、右の管を動しては四柱の器律を調ぶ。故に此天女をば美音天女とも名づけ、妙音樂天とも申なり(又平家物語にも出づ)とあるに觀ても辨才天に非ざるを知る。金光明經大辯天品に依れば、辨才天は女神にして文藝的能力を其特長とし、妙辨才を求むるもの、爲に咒を説く。辨才天といふは吉祥 女人林茶割 修道の障りとならば爲靈地 久成 天女の事にして、所謂七福神の一なり。これとは別なり。

如來 もと丸生如來とあれど丸生の語ならし。流曲拾遺抄に引きたる竹生縁起の詞の中には「丸上如來しヨライ」といふと下懸流流にては「クジヨオニヨライ」と強入り。後若の方當れり。久成は久遠實成の時にして、久遠劫以前に實に成佛せらる事を表はす語。即ち、釋迦の伽耶近成に對する五百處劫初三前の成佛の如き、彌陀の十劫成通に對する久遠の右佛の如し。源平感表記、平家物語共に「住吉の如來、法身の大家たり」とあり、之を言ひ換へたるものと覺ゆ。如來とは佛の事なり。竹生島縁起に本地は彌陀とあり。久遠劫陀たむの語もあればそれ等に依り、彌陀の四十八願中の一たる女人も 住生すべしとの誓ひを會ふて、珠に女人こそ冬受けれしといひたりと云ふ。それまでも 云。如來

には及はず。辨才天が あらた 雲霞あり 天女と現じ 源平威儀記に「紫磨の法を隠して和光の道
 既に女人なりよとの意 天女と現じ に出で給。假に瑞蔵の女身を控てしとあり。又
 竹生島縁起に辨才天女示現等の 悲願 衆生を救はんとする大慈悲心に基き紫磨。茲にて 心覺
 識とあれはいつらたるとん 此語無し。惟ふに仮 衆生を利 紫磨島 かほとまで疑ひとあ
 佛の ちつうあう 名の誤傳たるべし。利生 蓋す事。紫磨島 疑ひといふと義摩島
 に言ひ 五ち歸り 彼のまつと前 日月光り 云 日光月光並びに山の端を出づる如 かへす
 掛く。五ち歸り 五ち帰るに 海中に在りて雨水を司る神。人間 まれ人 を指す。本
 も 袂を返す 夜遊 軟舞。龍神 界に住めりにより「下界の」といふ 有縁の衆生 縁あり人。例へ
 より 云 佛は本より衆生を濟度す さまま 濟度の方が 多難なる意 有縁の衆生 佛を信ずる
 者の 天地に云 龍神が奇特を承 龍宮 龍王の住 む宮殿。

脇能

竹生島

三月

ツレ 辨才天(前ハ女)
シテ 龍神(前ハ漁翁)
ワキ 官人

早次第上

ツヨク

竹よ生るゝ鶯の竹よ生るゝ鶯の竹

生島詣急せん 抑といひ延喜の聖

代よはへ奉る。臣下あり。諸も江州竹生

島の明神ハ。靈神よて虚座の向。此度

君よ所暇を申し。唯今竹生島よ系

詣仕の 道の行上 四の宮や。河原の宮居末

竹生島

はやね。に。原。の。宮。居。来。は。や。ね。も。き。井
の。水。の。目。見。ら。ぬ。は。代。の。逢。坂。の。開。の
宮。居。を。伏。一。揮。又。上。越。し。は。志。賀。の。里。
鳴。の。浦。も。著。か。り。つ。鳴。の。浦。も
著。か。り。つ。程。の。鳴。の。浦。も
著。か。り。つ。見。の。釣。舟。の。来。り。の。
暫。ら。く。相。待。ち。便。船。を。さ。か。い。や。な。る。

シテサシ上
お。も。ろ。や。頃。ハ。糸。生。の。半。あ。い。が。浪。も
う。ら。ら。海。の。面。霞。み。渡。れ。朝。ほ
ら。け。長。閑。の。浦。の。舟。の。道。ら。ま
あ。か。と。あ。か。い。か。あ。い。か。浦。里。の
白。文。馴。れ。て。明。暮。軍。よ。う。ら。ら。づ。の。敷。を
つ。て。身。ひ。と。つ。を。助。け。や。せ。ん。と。伝
く。の。ひ。ま。も。浪。向。よ。明。け。暮。れ。て。せ。を

浦山あけて眺むれば志賀の都花園
 昔あからの山櫻真野の入江の船呼
 名所多きを数ふ名所多きを数ふ
 浦山あけて眺むれば志賀の都花園
 昔あからの山櫻真野の入江の船呼
 名所多きを数ふ名所多きを数ふ

浦山あけて眺むれば志賀の都花園
 昔あからの山櫻真野の入江の船呼
 名所多きを数ふ名所多きを数ふ
 浦山あけて眺むれば志賀の都花園
 昔あからの山櫻真野の入江の船呼
 名所多きを数ふ名所多きを数ふ

十

早ツトから上
 お舟を氣こらせん早 嬉ハレしやハレハ
 迎ムカひの舟フネ法ホウの力チカラと覺シえたりシテ 舟フネ
 殊コト更サラ長ナガ閑ノドをカしカふヨから風カゼもあカらカぬ
地下歌中名ナこそナさサるルあアみミや志チ賀カの浦ウラもあアらラち
 あるアル都ツへノ痛イタむムやハおオ舟フネはハなナりニて
 浦ウラをウ眺ノゾめメ給タマへヘやハ上ウ報キ所シの海ウミの上ノ所シの
 海ウミの上ノ國クニの近チカ江カの江カよヨ江カたタ出デるルの春ハル
お切

あれアやヤ花ハのハ白シ雲クモの降ツるル残ト
 時トキ知チらぬヌ山ヤマの都ツの富トヨ士シあアれレやヤ猶ナ
 さサえエあアるル春ハルの日ヒよヨ比ヒ良ラのノおオおオろロ
 吹フくクもモもモ沖ナカ漕カぐグ舟フネのノ盡ツきキぬヌ
 旅ツのノあアらラびビの思オモひヒをウかカしシめメるルのノよヨそソよヨ
 見ミ入イるルもモあアらラ舟フネはハあアれレ衣イ浦ウラをウ隔ヘ
 てテ行イくク程ハジはハ竹タケ生ナ島シマもモ見ミえエたりリやヤ
お切

緑樹影^{シテ}多^ク映^シんで 魚^{イサ}水^{ミヅ}は登^{ノボ}る氣^キ色^{シロ}
 あり。月^{ツキ}海^{ウミ}上^ノに浮^{ウキ}あんで 鬼^{オニ}も浪^{なみ}を奔^{ハシ}
 る。面^{オモ}白^{シロ}の島^ノのけしきや。船^{フネ}著^{ツキ}
 して 岸^キに 寄^{ツキ}りて 船^{フネ}が 揺^{ユル}りて
 神前^{カミマタ}へ 参^{マツル}つて 出^デ陣^{セン}の 旗^{ノボリ}首^{ノボ}り
 申^{マウ}す。辯^{ベン}才^{サイ}は 新^{シン}念^{ネン}の 辯^{ベン}才^{サイ}は
 新^{シン}念^{ネン}の 辯^{ベン}才^{サイ}は 新^{シン}念^{ネン}の 辯^{ベン}才^{サイ}は

た。勝^{カチ}つて あり。不^フ思^シ
 議^ギや。此^{ココ}島^ノの 女^メ人^ノ 禁^{キン}制^{セイ}の 辯^{ベン}才^{サイ}は
 女^メ人^ノ 禁^{キン}制^{セイ}の 辯^{ベン}才^{サイ}は

片断

辯^{ベン}才^{サイ}は 女^メ人^ノ 禁^{キン}制^{セイ}の 辯^{ベン}才^{サイ}は
 辯^{ベン}才^{サイ}は 女^メ人^ノ 禁^{キン}制^{セイ}の 辯^{ベン}才^{サイ}は

オミハ女體も其神徳もあらたある。
 天女と現れおまへませら女入を隔
 あ唯知らぬ人の言葉あり
 悲願を起して心費年ひかりき
 つらわりのさくより利は便に急らそ
 げよくおほど疑も 薙磯島の松
 蔭を便よよまをるあまふ舟われ人

出 上
 端 ヲヨク
 掛 (出端)
 山の端出つるこゝろを現れ給ふかた
 山殿頻に鳴動して日月光り輝きて
 また浪よ入らせ給ひけり
 われ此らみのあるぞとさひ捨て
 水中よのちとみら白波のまきり
 開き山殿よ入らせ給ひければ狗も
 向よあらまをて社壇の扉を押し

来序中入

竹生島

凡^ニ多^ク行^ハ事^ヲ 後^ツ上^ニ 抑^ス此^ノ島^ノを^シて
 神^ヲを^シ敬^ムハ^シ國^ヲを^シ守^ル 辯^ズ才^ヲ天^ノの^ノ我^ノ事^ヲ
 あり^ニ 其^ノ時^ニ 虚^ニ宮^ニの^ノ音^ヲ樂^ヲ聞^クえ^ル 其^ノ時^ニ
 虚^ニ宮^ニの^ノ音^ヲ樂^ヲ聞^クえ^ル 其^ノ時^ニ
 後^ノの^ノ月^ノは^シ輝^ク 少^シ女^ノの^ノ袂^ヲも^シも^シも^も
 おも^シら^ハや^ハ 天^ノ女^ノ舞^ヲ 後^ノ遊^ノの^ノ舞^ヲ樂^ヲも^シ時^ニ過^ス
 きて^ハ 後^ノ遊^ノの^ノ舞^ヲ樂^ヲも^シ時^ニ過^ス 月^ノも^シも^シも^も
 打^上打^返 打^上打^返

地拍子
 龍神の視
 獨吟

仕舞

渡^ル湖^ノつ^らら^ノ浪^ノ風^ノ頻^ニ鳴^ク動^スて^ハ
 下^ノ界^ノの^ノ龍^ノ神^ノ現^レたり^ニ 龍^ノ神^ノ湖^ノよ^リ
 出^テ現^レて^ハ 龍^ノ神^ノ湖^ノよ^リ出^テ現^レて^ハ 光^も
 輝^ク 金^ノ銀^ノ珠^ノ玉^ノを^シ彼^ノの^ノま^ニ以^テ人^ノを^シ捧^グる^ニ
 け^レき^ニあ^リか^タか^リけ^ル 奇^ノ特^ノあ^カ
 本^ノより^ノ衆^ノ生^ノ 濟^ノ度^ノの^ノ誓^ヲ 本^ノより^ノ衆^ノ生^ノ
 濟^ノ度^ノの^ノ誓^ヲ ま^まく^ニあ^リか^タか^リて^ハ 天^ノ女^ノ
 打^上打^返 打^上打^返

竹生島

ちたもちを現し。有縁の衆生の所願を
 かなへ。又下界の龍神とあつて。國土を
 鎮め。誓言をあらせり。天女の宮中より
 給へ。龍神はまをもち湖水に飛行して。
 波をけたて。水をあへて天地をむらち
 天蛇のちたもち。天地をむらちる天蛇の
 ちたもち。龍宮よりして。くろくはひる。

朝長

解題

本朝長の傳記より清涼寺の僧、朝長の遺跡を尋ふことを作れり。歌舞雜記に由名
 是の龍本作者註文、二百十番強田録等に世阿弥の作と記したれども中樂法儀世阿弥
 作曲中に無し。

龍之變式

變式の龍儀法は太鼓方にて頗る重き習事なり。太鼓の調べ方及出端の手常と變
 り。後シテは其音を聞きつゝ、出で三ノ松、二ノ松、一ノ松に止りて聴き置ます形有り。

諸の方便概

實感、機政と共に三修羅の一にて住頗る重き曲なり。前後兩本其仕組を異にし、
 各別種の趣致を謀ひ合け、總じて品好くして聴みに健かなるを宜しとす。

シテ

前は深井の面をかゝる程の女をれば、其心ばこそ若からず。且は二者目物にして現在物かれば
 優弱に流る事無く、折へて猶確りと謀ひ、表傷の情深からべし。此要領にて次第以下を臨

表す。ワキとの同若も抑へて静ならうちに確りとしたる處有り。中に就き「端は取り分きたらし云
 云はワキのまを承けて、かゝつて出づ。語は朝長自承の次第を女が語るものなれば、其心にて大體静に確り
 とあるべきも、心持儀息多ければ、萬と誓言古あるべし。」「さんせしこれよりクドキの調子に更へ、十分に
 龍めて沈み勝ちに確ふ。」「海傳に申せし以下の調は心持を殺め、態に言ひ、「誰かあるし云くは調子を上に
 取り、離れて諺ふ。後は品位を保ちて多クナク若やかに確りと謀ひ、餘りに勇壯なるを好まず。」「あら
 ありがたのし云この勢は美々しくかゝるやう確りと謀ひ、「頼もしいやしよ一歩の調子に更へて
 位を大きく、「揚枝津水し云くは確りと謀ひ、次のワキとの聯合より段々に健健たるべし。」「少りは確り確
 りとして運びあり。勢も時同じく「思はさりにし云くは少く折へて静に。」「朝長の跡を平

ワキ

上端は位大きく確ふ。ワキは力ありて地み無きが宜し。鶴高めに諺ふ。

地

「死の縁のし云くは無常の心を念みて、極静にしつと」と思ふ。

に唯りと述ふ。後はどつりとして運好からるべし。夕せば大いし位を取つて唯りと述ふ。此内いかなるれはしりやまを愛へ。上瑞霞は前よりまらりとたまら。ロンギはどつりとして唯む。唯は由雲し以下まをまきて、幾ふに唯りと致へと位の走るを好ます。

鮮解

嵯峨 山城國馬野原。清涼寺 時土宗。俗に嵯峨の得色堂と号す。僧舎無慮して

平治の乱

平治二年平治二年十二月のことなり。都を西ひらき、

大夫進朝長

大夫は五任の孫。朝長時に進五位下。中宮進

伊次

近江と美濃と。不政の関 美濃國不政郡原村大字村。花の跡

青巻の長者

長者は長者の長。長者の巻を巻く

草の巻

草巻水邊をはかきまきしり、例

穂に出す

思ふ事を外に現はすこと。花

雲のうちに

雲のうちに。雲の内に

雪のうちに

雪のうちに。雪の内に

雪のうちに

雪のうちに。雪の内に

雪のうちに

雪のうちに。雪の内に

雪のうちに

雪のうちに。雪の内に

の無きを注ぐ。長を身にかかち事を知りて心なり。朝 穂に出す

光の陰を

光陰を注ぐ。光陰を注ぐ

解けて

解けて。解けて

あへなく

あへなく。あへなく

三世の浄徳

三世の浄徳。三世の浄徳

一樹の陰

一樹の陰。一樹の陰

も他生の縁をほ深しと出でたるに際れらるか。他生の縁とは。死の縁の云。二人が偶行き違ひたりし

来世に遇ふべきか。ありあいの意。それ故に「三世の契」といへり。死の縁の云。二人が偶行き違ひたりし

一は達ふ(青)の巻に、一は巻の巻に、何れも其意。跡のしるし。巻の意。前の巻の巻に續けて朝長

通下たりとの心しや。青巻の巻に續けたり。跡のしるし。巻の意。前の巻の巻に續けて朝長

の巻に云。青野原。名所方南抄に「青野原は垂井より五町許。淺茅原。春まだ浅き頃なれ

古葉ばかりにて拾ふ才がやの。北郊。もと支那の山の名。漢以来墳墓の地となりたり。墓地火

葬場の如くに見ゆとの意にて北郊の煙と云ひ。鎌田。義朝殿の直。名は此鎌並に係え物語

轉じて雲と云ひ、轉じて七蹟空しきを云へり。金。義朝殿の直。名は此鎌並に係え物語

五丸。義朝の野間の内海。尾張國知多郡にあり。今は野間村と内海町と別な。都大崩。都

より近江に出づる龍幸進の山路をさす。卯月本には「都大崩とやらんにて」とあり。梁塵抄抄に「くづれ

坂」といふ地名もあり。大崩は相模駿河等の地名にもありて崩れたる峻崖の通称なり。これを「都の大崩」と

の意とするは。膝の口。膝が。清自害。平治物語に依れば朝長は父義朝に。路次。みちす。

死。路傍の女の死。御先途。将来の。曲ひかひなき。いひかひなきの。草徑。草の。亡骨。骨

の無き。由骨の懸か。若し誤と。十方。四方。宮仕へ。こゝにては。觀音懺法。懺法は懺摩

すれば三百年以前の誤なり。觀音懺法は家の天竺寺遺式法師が請觀世音菩薩瀧伏寺密陀羅尼經に依り

て作られたるものなり。天竺宗密洞宗等に觀音の真前にて之を讀みて供養し祈禱進布報恩の爲に

行ふ法。鈸鼓。讀經の時に鳴らす鈸鼓と太鼓。鼓は。後夜の。今の午。昔在靈山名法華。云。觀

懺法中の文にあらず。此四句一偈は支那の南岳慧思禪師の作と云ひ傳ふれども客ならず。法華と念佛

等は別勝にあらず。吾今三點云。観音撰法中の三教今の偽文。我今已具揚技津水唯願大恩表揚
 同一勝たうとの意。授受。我今再献揚技津水唯願觀音表揚授受。我今三點揚技
 津水唯願薩埵表揚授受の第三句を引く。観音の前にて行者が左手に水を入れたら淨器を掛け右手に
 揚柳の枝を持ちて此文を唱へ三回水を灌ぎて供養す。以て観音の加護を祈るなり。三點とは三回の意。
 菅洞家にては此文を宋音にて讀む故に茲にも其れに倣ひて宋音。玉文の瑞観。吾今三點の文を讀む
 を用ふ。但し三點はヤンテンにあらずヤンチヤンと讀むなり。念の殊。念珠。即ち數珠。
 朝に紅顔云。和漢朗詠集に「朝有紅顏誇」。石山寺。近江國滋賀郡石山村にあり。兵衛佐。義朝の
 を殺したるが爲世人呼んで惡源太といふ。平治の。石山寺。石山村にあり。兵衛佐。義朝の
 亂後、捕へられて、條河原に斬らる。時に年二十。長田。名は忠茂、鎌田。やみやみと云。義朝
 彌平兵衛。上治の連、頼朝を擁に於て京都に送り。長田。名は忠茂、鎌田。やみやみと云。義朝
 田に謀られて湯殿。一切の男子云。梵網經に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が
 母、我生々に是に逢て生を受けざることを無しとあらば、一乘
 の功力。妙法の。瞋恚の甲冑。佛教にては怒りは他を害するものなれば、一乘の一事とす。梓弓。
 「命」の枕詞なれば茲。修羅道。六道の一、常に闘戰。敵に合竹の。敵に逢
 枕詞。玉きはる。にては「魂」に冠す。修羅道。六道の一、常に闘戰。敵に合竹の。敵に逢
 竹に掛く。合竹は吾樂の詞、笙の管を數本同時に吹き合す。白雲紅葉。源氏の白旗、平
 こと。竹の節と節との間を「よ」といば次の此「世」の序とす。白雲紅葉。源氏の白旗、平
 かに深く。難儀の手。修羅道に遠近。修羅道に「落」しを遠近に。

朝長

正月

前前 前前
 シシ テレ テレ
 キキ キキ
 從從 從從
 者者 者者
 女女 女女
 備備 備備
 (素談ナシ)
 (素談ナシ)
 朝長之宣

二番目

早付
 この嶮峻清涼寺より出てたる僧
 こそ。さても此度平治の乱よ。義朝
 都を閉り閑さる中よも。丈夫の進朝長の
 美濃の國青墓の宿まで自害はて
 給ひたる由承り。われらも朝長の序
 縁の者よ。程よ。急ぎおの處より。

^{ワキ道行上} 伊跡をゆり申かへり思ひまはして
^{ヨウク} 近江路や。瀬田の長橋より渡り。瀬田
 の長橋より渡り。猶行く末に鏡山老女蘇
 の森を打ち過ぎて。末は伊吹の山風の
 不破の閑路を過ぎ行き青墓の宿よ
 著きよけり青墓の宿よけり
^{ツレ改第上} 花の跡よ松風や。花の跡よ松風や。

雪よも恨みあらん 此の青墓
 の長者よその草の露水の泡
 はあまのたぐひも哀をさる
 習あるよ。此の殊更思ひまはる人の
 歎や身のくへよ。あはる涙の雨とのみ。
 茶室の袖の花薄穂よ出まへ言の
 葉も。あはれありある有様か。光の

●小言
 陰を惜めども。月日の數ハ程ありて
 雪のうらみ。春のまよひ。つらきもの
 春のまよひ。つらきもの。凍れる涙
 今ハはや。つらきもの。寝たての夢。まだ
 持面影の見えども。やがて。痛きあり
 有様を思ひ。せむし。つらきもの。思ひ
 出づる。つらきもの。つらきもの。つらきもの

平家物語

序墓所へ。あつた。つらきもの。つらきもの
 兼つ。序跡甲。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 え。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 ひ。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの

一樹の蔭の宿り。他生の縁と聞く時ら。
 げんこくまにむの契の早げん早か早ら早も
 ーも早ま早ら早も早ま早ら早も
 朝長も地上死の縁の處も逢ひよ青
 墓の處も逢ひよ青墓の跡の志る
 草の蔭の青野が原の名のみして
 古葉のみの春草のさあぐら秋の浅

茅原荻の燒原の跡までもげよ北
 の夕煙一片の雲とあり清き一雲の
 色も形もあまの跡ぞ哀ありけるあ
 跡ぞ哀ありける早申早の朝長の
 去最期の有様委しく語つては聞
 かせの早申早さ早ら早ひ早て早痛早さ早ら早や
 暮れ一年の八日の夜よみくして心

朝長

早

あらけりて。鼓く音も。誰かといふこと
尋ねり。鎌田殿と仰せらる。程よ
うちを閉ぢまされば。武器がたると人四五人
内より入り給ふ。義朝は親子。鎌田金王
丸とやらん。ちからを頼みおぼしめさ
明けきり。河船の野向の内海へ
舟落おし。又朝長の都大崩

まて。膝の口を射させ。ちかく煩ひ給ひ
し。夜更けに静まつて。後朝長の所
聲より。南無阿弥陀佛。南無阿弥陀
佛と。二聲のたまふ。鎌田殿集り。こ
いの朝長の所。目書ら。申させ給ふ。
義朝教書。か。成。醫。は。こ。は。や。所。肌。衣
も。紅。の。染。み。て。目。も。あ。ら。ぬ。有。様

あり。其時義朝何んか自書しつる
 その作せらるる朝長連の下り。
 さるる都大膳を膝の口を射させ
 既に難儀より馬を走りしり
 まるる義朝の今に「おはせし
 路次を捨てし由なれり
 大にかくりたるは反は馬前
 險

ちの目屋ち母か。あつちを
 するはむか。あつちを母か。あ
 ちかしてあつちを母か。あつち
 津よあつち。難儀の手よあつち事。
 餘の口惜らるる。あつちを
 らるる。あつちを最期のお言葉よ
 あり。あつちを給く。義朝の清まり

地拍子
見の目也

つぎて。歎かせ給ふ所有様。おその見
 目も哀さをしらさるん。悲しき
 かなや。形を求むれば。苔底が打骨見
 ゆるもの。今更は無。さて其聲を
 尋ぬれば。草徑ぐら。骨とあつて。答
 めるものも。更にあ。三世十方の佛院
 の。聖身も憐む。ある。あ。ち。魂。幽

更のり
打切ニモ
(打切ニ習アリ)

市僧の中い
上

三十四

雲のなみ。嬉しと思はる。打切。か
 夕陽影。らる。か。夕陽影。らる。
 雲絶え絶え。行く雲の。青野。原の
 露分けて。彼の旅人を伴ひ。青墓の
 宿。帰りけり。青墓の宿。帰りけり。
 市僧。申。見。苦。く。暫らく
 ころ。市僧。留。あ。り。て。朝長の。所。あ。と

世音。三世利益同一體。眞あるあ。

 誠あるあ。頼も。や。聞け。妙ある。

 法のは聲。吾今三點。揚枝。

 津水唯願落埵と。心上。心耳をま。

 せら。主文の瑞調。感應。肝。銘。

 ちり。あら。あ。ら。た。つ。の。吊。ひ。や。あ。

 不思議。や。も。観音。懺法。聲。ま。な。て。

燈火の影。幽ある。よ。ぼ。く。又。れ。せ。

 朝長の影の。ぼ。く。よ。見。え。給。よ。若。

 若。一。夢。の。幻。々。本。よ。り。も。夢。の。幻。の。

 假の。世。あり。其。疑。を。止。め。給。ひ。て。尚。

 法。を。講。じ。給。へ。げ。よ。く。あ。や。り。よ。

 ま。み。え。給。よ。も。偏。よ。法。の。力。ぞ。と。念。の。殊。

 の。數。く。り。て。聲。を。力。よ。た。よ。り。く。ら。

早ハヤ真マコトの染シメるル 幻マヤカシと目メくらク 隠カクレらル
 早ハヤ面オモテ影カゲのノ 地チ上ノ敷シのノ あハいハらハまマのノ 形カタやヤ
 消キえエまマのノ 形カタやヤ 消キえエまマのノ 消キ
 えエまマのノ 燈トウ火カをヲ 情ナリくクまマのノ 朝アサ長ナガをヲ
 共トモにニ 憐アハレみミてテ 深コ夜ノのノ 月ツキもモ 影カゲ添ソひヒてテ 光ヒカリ
 陰カゲをヲ 惜オソみミ給タマへヘ やヤ 時トキ人トをヲ まマたタぬぬ
 浮ウ世セのノ 習ナリありリ。 唯タ何ニ事コトもモ 捨スてテ。

法ホウをヲ 説セツくク せセ 給タマへヘ やヤ 法ホウをヲ 説セツくク せセ 給タマ
 へヘ やヤ 所トコロにニ ありリ たタまマ 紅ベニ顔ガハあハつツてテ。
 世セ路チよヨ ほホいイとト 地チ上ノ 白シロ 骨ハネとト あハつツてテ 郊キョウ原ゲンよヨ 朽クちチぬぬ 昔ムカシのノ
 源ゲン平ヘイ左サ右ウのノ 朝アサ家カをヲ 守モリ護ゴへヘ 奉ホウりリ
 地チ代ノをヲ 治シめメ 國クニ家カをヲ 鎮チンめメてテ 萬マン機キのノ
 父チチをヲ 保ホへヘ 平ヘイ治シのノ 世セのノ 乱ラン

い。あ。る。時。ら。来。り。け。ん。思。ひ。な。ら。う。
 み。ら。馬。の。騷。備。よ。時。節。到。来。
 あり。程。の。嫡。子。無。頼。が。義。平。の。
 石。山。寺。の。籠。り。を。多。勢。の。無。勢。備。
 せ。ね。ば。力。あ。く。し。け。ら。れ。て。終。に。誅。せ。
 ら。れ。よ。け。り。三。男。兵。衛。の。佐。を。六。弥。平。
 兵。衛。が。手。に。獲。り。こ。れ。も。都。入。り。と。ら。れ。

横む本

拾ひぬ
能ニチハ打切ニモ

ける。父。義。朝。の。こ。れ。も。野。向。の。内。海。
 二。落。ち。行。き。長。田。を。頼。み。給。へ。も。頼。む。
 本。の。も。と。よ。雨。漏。り。を。や。み。く。と。討。た。れ。
 拾。ひ。ぬ。い。ち。も。あ。ら。ぬ。長。田。の。こ。い。ひ。あ。く。
 て。主。君。を。討。ち。奉。り。ぞ。や。い。ち。も。あ。ら。ぬ。
 此。宿。の。あ。る。一。の。志。も。女。入。の。あ。ひ。く。
 し。く。も。頼。ま。り。て。一。夜。の。情。の。み。ち。あ。や。う。

踏まがも。か。み。わ。り。の。ち。か。の。う。ら。ん。
 抑ミり正の。せ地の。契地そ。や。切地の。男子。
 ち。は。ま。の。父と頼み。萬の女人を。ま。ご。
 の。母と思入。今身の。よきま。ら。れ。
 たり。あ。ら。ら。親子の。い。い。は。り。歎た。
 あり。が。平ひも。真まの。集ま。志し。請け。悦び。
 申ま。あ。り。朝あ。長ち。後ご。生な。ま。り。心こ。安やすく。
 地拍子 請けの トモ

お。ほ。め。せ。ら。れ。頼た。む。か。し。ま。の。
 功こうが。あ。ら。ら。あ。い。や。り。が。未ま。だ。願ね。ま。の。
 甲か。冑くわうの。侍し。有り。様やう。ぞ。痛いた。ま。り。様やう。
 本ほんの。身み。あ。ら。ら。た。ま。ま。の。魂たま。の。善ぜん。所しよ。に。
 赴す。け。ご。も。魄たま。の。修しゆ。羅ら。道だう。に。残こ。り。て。暫しば。
 一い。苦く。み。を。受う。け。り。あ。り。地ち。上じやう。の。修しゆ。
 羅ら。の。苦く。運うん。は。ら。い。の。あ。り。ま。り。あ。り。竹たけ。の。

地拍子
ニニニニニニ
トモ

此せまてみー有様の地源平兩家
のりかゝ地上旗ハ白雲紅葉の散り
まどり戦ふは軍の極めの悲一さん
大駒を朝長が膝の口をのぶあふ
射させて馬の太腹は射つけらるゝ
馬の頻ふ跳ねあはれを鐘をこして
おんだんときりども難儀の手あれば

地拍子
ニニニニニニ
トモ

一里のあきかたを乗替はあは
のせらしてあはれは路を去のあは
て此青墓のかりり雑兵の手は
懸らんよりこも思ひ定めて腹一文
字のあき切つて其まゝは修羅道は
遠近の土とありぬる青野が原の
あはれあはれてなび給あはれあは

月天

てたび終へ

朝長

十四

姨捨

部の者、中秋月明の夜姨捨山に別りたり。昔此山に捨てられたる老女の亡霊現れしことと
作れり。右名を姨捨山と云ふ。又、姨捨、伯母棄、伯母捨等の文字をも當つ。後世、世
阿彌の作と傳ふれども世阿彌の中樂談儀に曲名を記さず。姨捨の事蹟は古今集雜の上に載り
讀人知らずの歌「おが心慰めわねつ更級やをばすて山に照る月を見てにまじたりものにて、後、大和物
法に此歌に附會して一條の歌謡を記せしが此話の初見なり。其歌法には「信濃の國更級といふ所に住み
し男、稚き時親に別れ、伯母を親の如くかへつきて若き頃より共に暮し居たりしが、其處此伯母をうる
さしと思ひ、伯母の老いゆくに怪いて思ふこと甚しく終に夫に迫り伯母を捨てよと云ひて聞かず。男
も其心にならず、月明たる一夜、寺に行くと偽り、伯母を肩負ひて高き山に行き、そこに捨て、帰りしが
さすがに多年の恩愛の情惜し難く、一夜眠りもつかず、折から其山の上より明をる月をさし入るを見
て、悲しきの餘り、彼のおが心慰めかねつ云との歌を詠じ、夜の明ると共に再び迎へ来りて昔の如くか
づきたり。それよりして此山を姨捨山といふ(意を取ら)とあり。次いで後撰無名抄には同じ説話を載せ
歌を老女が山に捨てられて悲しきの餘りに詠みしものとし、再び家に迎へ取られたる事は記さず。此二
書の歌法はやがて四碑となりて様々に傳はり、後世姨捨山を歌に詠まれ文に作らるる事多し。此二
亦取り入れられしものなり。されども最初の古今集の時に、既に作者も作の原因も不明なりしものな
れば、それより遂に後世なる二書の歌法は「をばすて山」の詞に由りて附會したるものと見らる。歌物法
には此種の作物語多きものなり。

辭解

月の名

「秋」に「明」をかけ、名高き明月の時の
「近き」意にて「秋」の語に接けたり。

姨捨山

信濃國更級郡に在り。されど
其所在に詳きとは難説あり。

今も同郡八幡村の西に姨捨の地名あれど之は後人の傳説に假託せしものなり。四季の月など、稱するは
遠に後世のことなり。此曲の曲據とも見るべき後撰無名抄には更級山即ち冠山を稱したるものとすれ
ども今の小谷御燈崎村なる長谷青山の異名小長谷(ちほつせ)山の轉訛なりといふ説を採るべきか。月の
名勝として多く歌に詠まれたれども、皆古今集の歌、大和物語、無名抄等の話柄を因として想像して詠
じたるもの。更級の月 姨捨山の 旅居 字を「旅あ」に傳へ誤りしものなり。假枕 假すめに
のみなり。

中宿

途中の、さこそと

大和物語の故事をさこ
そと思ひやれりたり。

面白からんずらん

面白からん
であらう。在所 姨を捨

姨捨

吉祥ニ菩薩一馬日月、應是觀音、天冠の間に云、觀經に「此菩薩天冠、有五百寶華、一々寶華、吉祥是勢至」とあるに據る。玉の臺は、廣長之相、皆於中現しとあるに據る。玉珠樓、珠玉の如く美しき樓閣。系竹、系は姓竹、廉しき臺、他方の淨土は西方以外の淨土。系竹は管、風の音が自ら系竹の心引かる。系竹の糸の縁法を、蓮、ハチスしたる心を「ハチ」と云、寶の池、湖をなすの意。取りて引といふ。蓮へり。傳へ語りしものか。寶の池、淨土に八つの池ありて七寶より成り。たつや並本、立つ波と掛く、並本は七重行樹とて、七寶の樹水中に蓮華咲くといふ佛説に據る。たつや並本、が七重に極樂を境らし由阿弥陀經に見ゆ。芬芳、芳しき。迦陵頻伽、音の絶美を以つて。類へて、撲いてといふ。おのづから、鳥の尾、無邊光、大勢至菩薩の異名。觀經に「但見此菩薩大毛孔光即見」。雲月、雲間の月、然れども、十方無量諸佛淨妙光明。是故稱此菩薩名無邊光」とあり。雲月、以下月の盈缺に寄せて、感象の理。有為轉變、諸現象は無常にして。露の間に、草の縁法を借りて。たふかくて。胡蝶の遊び、云、高麗樂に胡蝶の舞といふ曲あり、胡蝶の花に戲る、状を撲して作る。此意にて、返せや、袖を返す事に昔の願。亡女執の心、迷妄して執。閻浮世、あさま、朝にならうといふ。掛く、我れも見えず、秋姿の幻影が人の目より見えずたむ事。月、昔こそあらぬ、昔、掛てられて世に映捨山と云はれたらうか、念も。又旅人に捨てられて新に映捨山と云うけらうと云ふ。

重習
三番目

映捨

八月

シテ老女ノ慮(前ハ里女)
ワキテ旅僧(又ハ男)

見せし程よ

早次第上

ヨワラ

月の名ちあき秋あけや月の名ちあき
 秋あけや映捨山を尋ねん
 者ハ都方よ信まひはる者よとのわれ
 未だ更級の月を過ぎの程よ此秋思ひ
 たも映捨山へと急ぎの
 旅居の假枕暫一旅居の假枕又ま

道行上

打切ヤ

映捨

打切

出づる中宿の明か暮しと行く程よ
こゝろ名よお百段や。焼捨止の暮から
けり焼捨止の暮から
焼捨止よ来りて見ゆ。嶺平の
萬里の世よ。龍かへ千曲の龍かへ
の夜かまか。龍かへ千曲の龍かへ
此處よ休む。今昔の目を龍かへ

思ひ呼掛の心へもさあの旅人シテに
を伴中シテかへさるる都の者かへ
ゆが始のし。此處よ。かへさるる
身シテの心へもさあ。龍かへ
級シテの里よ。心へもさあ。龍かへ
秋のあや。暮の心を。目の名シテの珠よ
照る。流る。心へもさあ。龍かへ

いづくに住む人ぞ

まぢりまぢり今昔の日の田舎のこゝろ
諸の更級の入るにせしむるに
まへ姨捨の在所にけしむる程の
姨捨止のまぢり跡の同をせ給ふに
我が心慰めあむり更級や姨捨止
照の月を照らすにけしむるに
この本高のまぢり跡の昔の

姨捨のまぢり跡の昔の
此本の蔭のまぢり跡の昔の
の跡のまぢり跡の昔の
せとて今のはや昔語のあり
人の猶執心や遺つてのまぢり跡
も何とやらん物議のまぢり跡
風も身よまぢり跡のまぢり跡

姨捨

慰めおねり更級や。慰めおねり更級や。
懐捨山の夕暮よ。松も桂もまゝの木の。
緑も残りて秋の葉のはやし色しく。
一重山薄霧のしらぬう。風凜々く野。
ついでに叙一糸の正の氣色もあはれ。
上の氣色もあ。旅人こころい。
事終りぞ。かぎるは母かへ。

都の者よ。更級の目を承り及び。
始めて此處よ。来るよ。備へ都の
人よ。ま。ま。か。か。か。か。か。か。
目と共に。現のま。旅人の夜静を慰
め申さる。一。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
身は。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
更級の者。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ちやうどや。明あむらびの秋のあはれも。
きぬべし。今宵の月の借かりの女を。
ちよかたよ秋待ちあねて類ちよあはれを。
望月の見みたよ。昔むかしはあはれよ。
隈かみあはれ捨す止との秋の月つきあまらよ。
堪たぬぬこや。昔むかしはあはれ。
不思ふし議ぎやあはれ。思おもひの思おもひの夜よ。
早はやかん上の上

白衣の女を入い理りの給たまふ。薄うすみ入い理りあは
つあま。薄うすみ入い理りあま。昔むかしは。理りの
きぬべし。老おきなの姿すがたあはれ。あまらたり
何なにちやうどや。給たまふら。あまら。あはれも。姨いへ。
捨すの山やまの老おきな女を。借かりの女を。
帰かへる秋あきの夜よの。月つきの女を入い理りあまら。して
草くさを敷しか。袖そでの露つゆの。
早はや

え、
 ちみ色この夜露のへりり野れそ
 めくうらあきや地上果盛みけたる女郎
 花の盛みけたる女郎花の草衣志ほ
 たりて昔たよ捨てられ一程の身を知
 らで又姨捨の山よ出て面を更級の
 目よ見ひひも果あやぶや何事も
 夢の中のあうくわんわん思はるや

思草花よめで月よそめて遊らん
 げよや興よひられて来り興つきて帰り
 一も今のちうちと知られたる今宵の
 空の気色あかシテカシ然るよ月の名所
 ちうちあれど更級や姨捨山の曇
 ちまき一輪満てる清光の影團こして
 海崎を離るシテ然るや諸佛の法誓

地 勝方ありては、
 影 慈院光明の影ありては、
 程 西より行くに、
 勸められんが為と、
 彼の如來の右の脇士として、
 殊に道すむ重き罪を軽くせんが、
 力を得る故に、大勢を以て、
 号すべし。

天冠の向は、
 他方の浄土を現すと、
 樓の風の音系竹の調より、
 蓮の色は、
 寶の池のほとり、
 花散りて、
 加陵頻伽のたぐひ、
 聲を

映 舎

たぐへてもろともは。孔雀鸚鵡の。
同く轉る鳥のおのづから。光も影も
おあめで。至らぬ隈もあひのけ。無邊
光とも名づけたり。然れども雲月の
ある時。影満ち。又或時。影缺くる。
有為轉變の世の中の。空のあまを
示まあり。昔戀も夜遊のそで

ワカ上

序之舞

地上

打上頭三付

シテ中

我がころろ。慰めあわづ。からあや
懐捨山。照る月を見て。照る月を見て
月よ。馴れ花は。戯る。秋草の露の
向よ。露の向よ。あらく。何よ。現
れて。胡蝶のあそび。戯る。舞の袖
返せ。返せ。昔の秋を。思ひ出で
たる。妄執の心。や。方もある。今宵の

庚舎

七

秋風身よ志みぐくと。戀もさる昔。
 志のさるさる。圖淳の秋よ友よ。思ひ
 居れば夜も既よ志らくとははやあたま
 にもありぬれど。あれも見えそ旅人も
 帰らあたま。ひさしり捨てられて老
 女。昔こそあらぬ今も又姨捨山
 とぞありよける。姨捨山とありよけり

柏崎

解題

謡ひ方梗概

柏崎殿の妻、夫の死し、愛児の遊世せし、更に、狂氣して善光寺に迷ひ行きしが、其如來堂
 にて通を愛児に遊遊したる事を作す。狂乱もの、中にても前後作たる。中樂後儀
 に「うかひ拍子」をば、是をたゞ（接並）の左衛門五郎作也。さうながら何れも思きとて、除きよき
 ことを入れられれば、皆女子の作感べし。拍子には土車、能の曲舞をいれらるゝと見ゆ。栗田の初進申樂所演
 前は表傷、後は眞の狂女にして、心持、復急変化多し。シテ 前後はおくたててし
 れは、能く文味を會得して、謡はさるさるからず。シテ つとむと寂しく、悲痛
 の心持有るべし。出の「たに小左郎とは」云々は、調子餘り高かぬやう靜に謡ふ。以下ワキとの問答の中、何
 と若か「は確りと出、」と進子をば「と前へかけて扱ふが宜し。此程は」より、クドキの調子にて、温やかに
 謡ひ、氣はかゝれと運びはつけず。ロンキは、前下に取れて寂しからず。こげにや敷きと云々は、形見を見
 る心に、情然とあふべし。さても以下文は、ロンキより、斯か引き立て、さうりめに、謡ふうち、つと
 りとしたる味は、ひ有るべし。後は、狂亂し、郷里を、出づるものたれば、前と全然其扱ひ、心持を異にす。こ
 れたゞあらんとは、云々は、氣をかけて、確りと出、句毎に多少の復急を持ちて、子の行くへをも、白糸の
 と一聲の調子にて、扱けぬやうに、謡ふべし。サシは、氣を更へて、さうりと、謡ふ。ワキとの問答の中、「教へは
 とより」以下、柔か、りて、綴を、は、す、み、行、き、ま、た、こ、そ、云、々、と、氣、を、乗、せ、て、確、り、と、強、い、地、へ、渡、す。い、か、に、中、外、は、
 少く、投、ま、の、實、め、た、る、心、に、は、情、靜、に、謡、ひ、出、し、あ、ら、い、と、ほ、し、や、し、う、再、び、狂、は、り、き、心、に、は、調、子、を、新、か、上
 にとり、か、い、り、め、に、謡、ふ、が、宜、し。九、品、蓮、臺、の、は、少、く、確、り、と、次、の、サ、シ、以、下、は、や、靜、に、あ、ら、い、と、ク、セ、の、初
 の、上、端、は、確、り、と、強、い、後、た、る、は、さ、ら、う、と、扱、ふ、ロンキは、親、子、と、あ、く、し。次、第、以、下、凡、て、此、心、に、て、謡
 再、會、の、喜、み、は、調、子、晴、れ、や、か、に、喜、に、満、ち、て、強、い、が、宜、し。ワキ 素、被、男、物、を、は、重、く、れ、ぬ、や、う、ハ、キ、
 ふ。シテとの問答は、慎しやかなるべし。ロンキは、清、短、の、形、見、を、渡、す、處、に、疑、す、心、持、地 普、濟、り、に、云、々
 によ、シテ、よ、う、も、運、び、て、承、け、渡、す。ワキ、ツレ、は、輕、難、に、な、ら、ぬ、を、程、に、輕、く、扱、ふ。地 普、濟、り、に、云、々
 りと、強、い。さ、か、ら、ん、父、が、云、々、も、靜、に、父、が、別、れ、は、以下、さ、う、て、低、め、ず、さ、ら、う、と、強、い、て、好、く、復、急、に、心、
 シテの、憂、き、心、中、を、表、は、す、べし。後、は、シテの、強、と、相、俣、ち、て、好、く、狂、女、物、の、趣、有、る、べし。亂、れ、心、や、狂、ら、ん、の、
 一句、柔、を、か、け、て、さ、ら、う、と、受、く、愛、き、身、は、は、や、と、靜、め、て、確、り、と、出、さ、ら、う、と、強、い、と、運、び、て、
 調、子、好、く、強、い。頼、も、一、や、し、は、柔、を、起、り、て、稍、高、く、強、い、は、過、す、は、す、か、り、と、受、け、て、引、き、ま、て、強、い。ク、リ
 は、高、め、に、さ、ら、う、と、扱、ひ、サ、シ、は、シテの、調、子、を、取、り、ク、セ、は、餘、り、位、を、靜、め、ず、斯、か、氣、を、乗、せ、て、強、い、が、宜、し。ロンキ
 以下、は、喜、を、旨、と、て、調、子、好、く、さ、ら、う、と、強、い、納、む、べし。團、原、や、は、ソ、ノ、ワ、ラ、と、強、い、は、ソ、ノ、ハ、ラ、と、強、い。

注意すべき語の方

後段クワの後に「異香満ち満ちて」の二語はナしく運びを定めて置ふ。他に例ナシ。

辭解

夢路と添ひて云

永き旅路に夢心地の日数を重ねて今故郷に帰らざりては現實なりとの意

拍吟段

拍吟は後段の拍吟に在り。拍吟段はその

雪の下 舞臺の南の地

一通り降る云 道を通ると村の山の内

舞臺の山北明道、今は上坂村の大寺。村西の「やま」

地名に掛く。袖さこまざる

文書に北國に近づくに降りて雪れり。油

地名の確本と通はせ。舞臺より。心もとたや

舞臺の方位より吹きくる風

さへも像の如くしにの意

命つれなく 動も動もなき身。果や知られむ

らん父 善光寺

長野市に在り。皇極天皇勅命によりて本田

とし 如来堂

支那、西衛を経て欽明天皇の時我國に渡來し、

物部西氏の修業を賜せし歴史に著るる佛像なり。

うたてやな 情無き心あらん人云

へをも云 行方を知らしぬを由來にかけ、

明な 思には死なれりけり

捕の茶 憂き身は何となくを捕の

さく井の上

人なら末世の衆生は成佛すべき他の方法を段なり、

火 善光寺の縁起に「昔油の料盡きて燈明を挑けりしは

ろは三物

乱舞

一念稱名

白舟

聖衆來迎

佛菩薩の聖者の群衆

注し、麻衣、親の扱ひ、常寂如の里、水内即飯山所、

唯心の浄土、九品上生の位、極重悪人、慧心僧都の住を要

光明遍、常の燈、善光寺の縁起に「昔油の料盡きて燈明を挑けりしは

形見こそ、出でたる、善光寺の縁起に「昔油の料盡きて燈明を挑けりしは

善光寺の縁起に「昔油の料盡きて燈明を挑けりしは

に乗り来りて浄土に迎へ取らるをいふ。「蓮臺の花散りし」異香薫
 「白虹地に満つ」とは皆空を来迎の瑞相を形容したるなり。飛花落葉云々 人世の無常を説く。有
 化の性を有する物の。電光石火 人生の生死の極めて短時間たる
 常に移り変わりゆくをいふ。電光石火 比喩。碧巖緑に「磐石火閃電光」 道芝の露云々 添ひはてしめぬ親子の
 き身と續く。狭衣に「尋ぬべき草の原」 三界 佛教にて輪廻轉生する迷ひの世界を。真如平等 眞如
 さへ指拈れて誰に向はまし道芝の露」 三界 三種に大別し、欲界、色界、無色界となす。眞如平等 眞如
 實知常の義、一切万有の實態を指す。此實 煩惱のきづな 心身を惑はし惱ます精神作用。之あるが爲に身
 体は絶対無差別なるが故に平等といふ。煩惱のきづな 心身を惑はし惱ます精神作用。之あるが爲に身
 はやがらむといふきづな。罪障の山高く 空觀に「罪障山高以力不能斬 煩惱海深以手
 とは繁きとめたる纏。罪障の山高く 不可視。往生礼讃に「煩惱深無底生死海無邊」 身三口四意三
 身にて犯す罪三、殺生、偷盜、邪淫、口にて犯す罪四、妄語、綺語、惡口、兩舌、意にて犯す罪三、貪欲
 瞋恚、愚痴、之を十惡といふ。十の道とは十箇條の罪の意、此十罪あるが爲に生死を解脱せんと難しとなり。初の御
 法 華嚴經 三界一心云々 華嚴經に「三界一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別」とあるを引く。三界
 を指す。三界一心云々 華嚴經に「三界一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別」とあるを引く。三界
 の三者を別物視するは畢竟見たるに過ぎず。接りの 已心の弥陀 觀經に「是心作 佛是心是佛」
 上より見れば平等絶對にして三者の差別なきこと。已心の弥陀 觀經に「是心作 佛是心是佛」
 「池底純以金沙布地」とあれば極 教あまたに云々 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 樂を以て黄金の岸といへり。教あまたに云々 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 る浄土にも九品の 寶の池、功德池 阿彌陀經に「極樂國土有七寶 玉の床 無量壽經に「講堂精舍宮
 別を生ずとたり。寶の池、功德池 池ハ功德水充滿其中」。玉の床 殿樓觀音七寶莊嚴自然
 化 量なき命の佛 阿彌陀の設法を無量壽佛と 若我成佛十方云々 阿彌陀佛の四十八願に「設我得佛と
 成」 量なき命の佛 阿彌陀の設法を無量壽佛と 若我成佛十方云々 阿彌陀佛の四十八願に「設我得佛と
 と解説せり。その次句に十方衆生といふ法あれば茲には、十 本願 本來の 誓願 たなびく山 新古今集に「こゝに
 方の序辭的に若我成佛の法を用ひたり。何等慈悲の願をなす。本願 本來の 誓願 たなびく山 新古今集に「こゝに
 こ白雲の棚引く山や西に 彼國 極樂 墨深の云々 墨深は清水。面忘れは願を忘るること。墨深の身と云ひか
 あらう」とあるを借る。彼國 極樂 墨深の云々 墨深は清水。面忘れは願を忘るること。墨深の身と云ひか
 世の花さかりお忘れ 園原や云々 新古今集に「その原や伏屋に生ふる若本ありとは見
 ても折りてけりかなし 園原や云々 新古今集に「その原や伏屋に生ふる若本ありとは見

四番目 畧三番

柏崎

十月

十方花 若(誦ナシ) シテ母 若(後ハ物狂) ワキ小太郎 墨ツレ僧

口半次上

ヨウク

夢路も添ひて 古里よ 夢路も添ひ

て古里よ 帰るや 現あるらん といひ越

後の國 柏崎殿の 市内よ 小太郎と申せ

者よ 頼み奉りし 人の 訴訟

の事いひて 在録倉まで 虚座いひら

唯かりそめよ 風のいさちと 作せらひて

考よし

程なく寒くあつて給ひし。又馬子息
 花若殿も同く在鎌倉より西座のひ
 一は又座の馬別を歎き給ひ。いふも
 なく西座せよ。かゝる同花若殿の馬
 文の形見の品を賜つて入唯今
 吉里柏崎へいふ家から道行上乾ぬぬ
 日影も袖やぬらぬら日切日影も袖や

又ハ
 雪の下に
 通し

ぬらぬら今行く道は雪の下。一通り
 降つ村時雨。山の内を馬たえ入ぎ行けば。袖
 汗汗え増る旅衣。碓氷の峠打ち馬たぎて。
 越後より早く著かぬ。つり越後より早く
 一は又座の馬別を歎き給ひ。いふも
 なく西座せよ。かゝる同花若殿の馬

著かぬ。つり越後より早く著かぬ。つり
 一は又座の馬別を歎き給ひ。いふも
 なく西座せよ。かゝる同花若殿の馬

便も嬉しき形見を届くる音
つれなき一箇をばかき
唯ありきあはれなき
其ぬき昔語の形見を
見よとて笑ひてや最期のちり
あはれなき事なりと語り
あはれなき事なりと語り

唯田の時をばかき
最期もあはれなき事なり
一あり昔語の形見を
三年離れて其後あはれなき
の中あはれなき事なり
歎かきあはれなき事なり
あはれなき事なり

父が別れい...
 名残も子程の形見あ...
 たの父の恨めや...
 一とて...
 うちよ...
 出づ...
 り...
 悲...
 帰...
 思...

白崎

F

地

早...
 若殿の...
 早...
 悲...
 帰...
 思...

人に就ぶいふを給むけりてまじきやう

かゝるにてもおもひて別れ唯ひま

志くもたな女も思ひか。その行く入

ちも白糸の 地 刺しやねらん

けよ シテサシ上 身のあだありけりと。誰

ぞ カケリ 打上 けりて虚言や。思ひにあらん

けりと。詠文も ユツワリ 理や。今身のよよ知ら

●獨吟仕舞

れたる。いそよそ カケリ 打上 入るや。子の故と思

へ恨め カケリ 打上 や。 カケリ 打上 身は何と捕の

葉の拍 カケリ 打上 崎 カケリ 打上 ち カケリ 打上 ね カケリ 打上 び カケリ 打上 せ カケリ 打上 ぎ カケリ 打上 越後の

國府 カケリ 打上 の カケリ 打上 著 カケリ 打上 せ カケリ 打上 ち カケリ 打上 ね カケリ 打上 び カケリ 打上 せ カケリ 打上 ぎ カケリ 打上 越後の

一 カケリ 打上 ち カケリ 打上 ね カケリ 打上 び カケリ 打上 せ カケリ 打上 ぎ カケリ 打上 越後の

草の カケリ 打上 い カケリ 打上 つ カケリ 打上 ま カケリ 打上 ぎ カケリ 打上 と カケリ 打上 知 カケリ 打上 ら カケリ 打上 ぬ カケリ 打上 心 カケリ 打上 の カケリ 打上 麻 カケリ 打上 衣 カケリ 打上 ち カケリ 打上 ら

遠 カケリ 打上 くと カケリ 打上 行 カケリ 打上 く カケリ 打上 程 カケリ 打上 ち カケリ 打上 松 カケリ 打上 風 カケリ 打上 遠 カケリ 打上 く カケリ 打上 寂 カケリ 打上 ち カケリ 打上 ね カケリ 打上 ら

常盤の田の... 野原の本郷の田... 相... 別...

常盤の田の... 野原の本郷の田... 相... 別... 常盤の田の... 野原の本郷の田... 相... 別...

淨土の國へ時。其樂は法華の樂に勝る。
 内障にして極樂の九品十上の樂に勝る。
 其の樂は法華の樂に勝る。
 此の樂は法華の樂に勝る。
 何れも聲に勝る。南無阿彌陀佛。
 頼も頼も。釋迦の佛。
 此の樂は法華の樂に勝る。

●小話

地

地上

地

地上

地

地

地

地

地

此の樂は法華の樂に勝る。
 内障の樂に勝る。光明遍照十方の。
 樂に勝る。常の樂に勝る。影頼む。
 使念佛由せん。使念佛由せん。
 此の樂は法華の樂に勝る。
 子直垂の別。此の樂に勝る。
 形見の今。此の樂に勝る。

信

乱舞まわして
見せんとてま

隙のあつらひのさむい髪を思ひ
知られたるしを如きはまの
後生善所を祈らばと思はる
あつらひのさむい髪を思ひ
萬何事かまのさむい髪を思ひ
とやらんを射さる入致連致の道も
達者あつらひのさむい髪を思ひ

とて人びとに乱舞まわして見せんとて
鏡直垂より出だす衣紋を著
あつらひのさむい髪を思ひ
人よ雑言せて扇おの取り鳴る籠の水
その一念行名の聲のさむい髪を思ひ
光明を待ち取らば思ひ
九品蓮臺の花散りて
果香満ち

名

十

●獨吟サシクモ

満ちて人よ黄ぐ。白虹地よ満ちて。空
 けり。せ向の幻相を觀む。
 飛花落葉の風の前より有為の
 轉変を悟り。電光石火の影のうら
 ぶ。まの昔を回顧し。めめて驚く
 べからむ。あらむ。後世の夢と纏む
 假の親子の今をたよ。深ひ思へども

●仕舞

せぬ首さきの露の憂か。身の置置を所
 誰よ向ま。旅の道。こゝも憂か。
 せのからむ。や。悲みの涙眼よ。涙り
 思の煙胸よ。満つ。つら。く。これ。を。案。む。
 つ。三。界。は。流。轉。して。猶。人。向。の。妄。執。の。
 晴れ難き雲の端の月のは影や。明け。き。
 眞如平等の喜。ま。ら。んと。た。よ。も

歎きして煩惱の絆は結ばほしめんと
悲しき罪障の山高きは此の海深
いよさらへり此まよ此身を浮めんと
げは歎けども入向の身三口四意三の
十の首多ありま シテ上 此の法は
三界一心あり心外無別法心佛及衆
生と聞く時は是く三無差別あり疑の

あべかやごの経に如来唯心の澤土
あべくも尋ぬべからむ此寺の池の
蓮のそへ事やあむら知らん唯願
もく影頼む者や力の助け船黄金の
岸よほむべしそましく樂文を極むある
教もまたよ生れ行く道様どの品ありや
寶の池の水功德池の濱の真砂敷

見... 見... 見... 見... 見...
 園原や伏屋のまの常木のあり...
 見... 見... 見... 見... 見...
 今... 今... 今... 今... 今...
 嬉... 嬉... 嬉... 嬉... 嬉...

阿漕

解題

古く阿漕、阿古責、阿古本の字を當てたるもあり。殺生禁断の所に綱を引きたる科に
 より海に沈められし海人阿漕といふもの、之を靈、地獄の苦患と説く事を作れり。六帖に出でた
 る阿漕の鳥の歌が種々傳へ送らるゝと共に生じたる卷終を基としたる作なり。後世の書に世阿弥の
 作とあれども世阿弥の中楽法儀の作曲と譽げたる中に無し。諸流流名寄に「全剛は阿古本とあり。」
 謡ひ方梗概 前段の趣は鴉飼に似たりともそれよりは節も細かく作も聊か重し。後段は善
 哉しき海人、ことには禁断の所に殺生をすする悪人なれば、はなみを本とし抑へて寂しく謡ふべし。聲づかひ
 節扱ひ共に美しからせずして趣あるべし。出の一声は上述の心得にて寂びてしつとり謡ふ。悔恨の心
 は元なり。サシは少しさなり心。ワキとの同答惣じて思深かるべし。謡は前段中の謡ひ所、句の緩
 急心持に心を置きて。中音クドキになりて「受くるや」と云は破りと聲に心持して感慨深く地に泣す
 ロンギは氣を更へ、地を受けて少し引き立つる心。一句二句少し寄せる心にて、「すはや手繰りの」とすか
 りと氣をかけて出で地み無く地に泣す。後は妄執去り難き漁人の重ねて現世の姿と頭はし、地獄の
 若患と訴ふる心なれば大體の心得は前シテに同じきも一層情趣の痛切なるやう清みと本と謡ふべし。
 さりとて強て聲と作るは宜しからず。出の節剛柔の節の變化多ければ能く謡ひ懐けて流ること
 無かるべし。「今宵は」云の上音よりは氣を張り心持を更へて引き立て、謡ふ。調も確りと地み無く、「道
 わ」以下それれ心持あり。イロへの後「伊勢の海」云は一声の調子にて大かゝく、「思ふも怨めし」はや、静めて
 扱ふ。ワキ 能くは僧ワキ又は男ワキなれども未詳には僧ワキの心持にて宜し。次第は静に大きく、
 不。ワキ 名告詞、著せりワキ等の通り、通行、待謡は穩かに謡ひ、シテとの同答、掛合等はシ
 テを助けて事々
 しからざるべし。地 一の地「物の名も」の上歌は静に引きしめて大きく謡ふ。謡の後には「安んずる」といふと調子を
 べし。ロンギは氣を更へ、靜なる中にも引き立て、謡ひ出す。「細の綱」はシテを受けて出、以下後急の強
 い所肝要なり。「俄かに」より氣をかけて位進み、「疾風多き」とかかつて謡ひ、以下充か氣を乗せて運ぶ
 「はを」といかにと氣をわけて「聲」の廻しにて位を静め、以下全く趣を更へしつとりと謡ひ納む。後は「唯
 罪とのみ」の節強く乗つて謡ひ、「且みつ」の上歌にて氣を更へ、節は弱なれど強めに心を置きて上調子に
 ちうぬやう扱ふ。「思ふも怨めし」はシテを受けて出、次第に氣を乗せ、そ
 れぐの緩急を味はひて謡ふべし。此年リ心持多し。終く想を要す。

辭解

心づくしの秋 古今集に「木の向より生りくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」とあるを

日に向ふ 日向の國の字を引延べて九州より東方に向いて船出すと述ぶ。八重の潮路 遠き波の泡の音を

阿漭 伊勢國津市東方の海濱一帯の稱なり。されども此名は古典に所見無く、唯和歌に基く巷説に

浦 浦の音を借りて、裏の縁にて、一乗の妙なる花 法華經と云す。一乗の妙典とも言ふに

墨衣 僧衣。其縁にて紐の音 借り日にも引く。はや 借り日にも引く。

海士のかる 古今集に出でたる典侍直子の歌を其後後ニテ出の縁とせり。歌意はわれ一人我身を泣き歎くのみにて決して世の中を恨むまじ

浮世の業 浮世の事。尉 尉老。伊勢の海 海平藏表記に出でたる歌(ま向人こそ) 六帖

波ならで 海士の衣の波に乾す履等は常なれど、これは罪業を悔ゆる 身の秋 身は秋と云

田夫 農夫。殺生 五戒の一たれば「かくあさまさき」 伊勢を 伊勢を

見る目も軽き みるめは海濱の名。其藻を列るといふ音 海士のたく藻 新後古今集に「更

物の名も 秋陽雜記に此連歌を云せり。前句「草の名も處によりてかはるなり」 藻鹽や

煙も 後後後遠集に「塩竈の浦の煙は絶えに 教島 秋道と云ふ。海士なれども和歌を解する人並に

うろくづ 鮎すなどり 阿漭といふ海人 此事秋陽雜記に記したれども法曲以

若みの海 佛敎にて生死若惱の極 冥途 死後の魂の 娑婆世 阿漭が

恨めや 浦の音と恨 呵責の責 地獄にて責めらるること。阿漭が浮名 六帖の歌の意を引き、思ひ

錦木の 陸奥にて恋する男、錦木といふ木を女の門に立て、文に代へたる風習ありきといふ故事。

憲清 西行法師の法名なり。法師の法名を稱し、思ひなすかな。此事は錦木に作られて

うらぐれ 浦の音を借りて、裏の縁にて、一乗の妙なる花 法華經と云す。一乗の妙典とも言ふに

一乗の妙なる花 法華經と云す。一乗の妙典とも言ふに

墨衣 僧衣。其縁にて紐の音 借り日にも引く。はや 借り日にも引く。

海士のかる 古今集に出でたる典侍直子の歌を其後後ニテ出の縁とせり。歌意はわれ一人我身を泣き歎くのみにて決して世の中を恨むまじ

浮世の業 浮世の事。尉 尉老。伊勢の海 海平藏表記に出でたる歌(ま向人こそ) 六帖

波ならで 海士の衣の波に乾す履等は常なれど、これは罪業を悔ゆる 身の秋 身は秋と云

田夫 農夫。殺生 五戒の一たれば「かくあさまさき」 伊勢を 伊勢を

見る目も軽き みるめは海濱の名。其藻を列るといふ音 海士のたく藻 新後古今集に「更

物の名も 秋陽雜記に此連歌を云せり。前句「草の名も處によりてかはるなり」 藻鹽や

煙も 後後後遠集に「塩竈の浦の煙は絶えに 教島 秋道と云ふ。海士なれども和歌を解する人並に

うろくづ 鮎すなどり 阿漭といふ海人 此事秋陽雜記に記したれども法曲以

若みの海 佛敎にて生死若惱の極 冥途 死後の魂の 娑婆世 阿漭が

とがり。われからは海草に栖む鹿の名、これを我
 心からの意に綴らんとて上二句を其序とせり。
 く流るる高層月夜。宵ながら入
 るといふ意にて入汐にさかかく。
あごの海 此海名義葉集に多く見えなれど何れも志摩又は根津の海にて伊勢に關係無し。
 阿漕の詞に綴る事の修辭上の便ありしをなすべし。
 阿漕の詞に綴る事の修辭上の便ありしをなすべし。
 玉の意を以てたまくと發けたり。
持網 手に持ちて魚
 移ふ。
火車に業績む 火車は地獄にて罪人を乗する車。それに身を乗
 するを罪業とと漢載する如く云いなるなり。
目の前の
地獄 佛教にて淨土も地獄も己の心に
 存りと説きたればかくいふ。
紅蓮大紅蓮 共に佛説八宝地獄の中。紅蓮は酷烈な
 る寒氣に膚肉の焼けて紅蓮華の如くな
 る地獄。大紅蓮は其狀の
 受に基き地獄。
焦熱大焦熱 同上八熱地獄の中。焦熱は火熱に焼かれて膚肉の
 焦げ爛る地獄。大焦熱は其二層基き地獄なり。

四 番 目

阿 漕

九月

ワシテ 阿漕、靈(前ハ漁翁)
 旅 僧(又ハ男ニテモ)

早次第上

ヨワク

心づくの秋風よ心づくの秋風よ。
 本に向の月ぞまきくまき 此の九州

日向の國の者よ。われ未だ伊勢

だ神宮よ。素らまの程よ。唯今思ひまら

ての 日よ向の國の浦舟漕ぎ出で

國の浦舟漕ぎ出で。八重の潮路を

可 漕

打切

遙々と分けこゝ浪の淡路灣通は千
鳥の聲聞きて旅の寝覺を須磨
の浦開の戸もも明け暮れて阿漕
浦よ著るまゝりつ阿漕が浦よし
けり 急なる程よいはや伊勢
の國安濃の郡とやら申の暫らく
人を相待ち處の名所をも尋ねんと

思ひの 思ひの 思ひの
海士衣身の秋とつと限らま
せを渡の舟とつと限らま
せを渡の舟とつと限らま
かへしめ一職を替む田代も
かく渡も一職を替む田代も
物の命を殺かいつの業一か
つての業かぬぬと眼くぬぬに
かぬぬに

業のしと程もと取つて海に引か
早^早のしと程もと取つて海に引か
早^早のしと程もと取つて海に引か
伊勢の國にもとる。た浦をいふと、
處を申さず、たに海に引か
浦と申す。たに海に引か
が浦もいふと、たに海に引か

の海に漕が浦もいふと、たに海に引か
題のしと程もと取つて海に引か
そや、たに海に引か
旅人や處の和歌も、たに海に引か
たに海に引か
阿漕が浦もいふと、たに海に引か
題のしと程もと取つて海に引か

目^ニの^ニあ^ニり^ニか^ニ身^ニあ^ニて^ニ賤^ニ女^ニ給^ニひ^ニら
 ぶ^ニよ^ニ名^ニ所^ニ着^ニ跡^ニよ^ニ馴^ニれて^ニ
 年^ニ経^ニぶ^ニに^ニあ^ニか^ニ海^ニ士^ニの^ニ焚^ニく^ニ藻^ニの^ニ
 夕^ニ煙^ニ身^ニを^ニ焚^ニく^ニあ^ニら^ニあ^ニら^ニぬ^ニ
 伊^ニ女^ニを^ニ所^ニよ^ニの^ニ友^ニの^ニ音^ニも^ニ變^ニり^ニぬ^ニ
 聞^ニき^ニ給^ニ入^ニ地^ニ上^ニ敷^ニ物^ニの^ニ名^ニも^ニ處^ニよ^ニり^ニて^ニ變^ニ

● 桐 芥

一^ニり^ニけ^ニり^ニ處^ニよ^ニり^ニて^ニ變^ニり^ニけ^ニり^ニ難^ニは^ニの^ニ
 蘆^ニの^ニ浦^ニ風^ニも^ニい^ニよ^ニ伊^ニ勢^ニの^ニ濱^ニ菰^ニの^ニ
 音^ニを^ニあ^ニり^ニて^ニ聞^ニき^ニ給^ニ入^ニ藻^ニの^ニ煙^ニも^ニ
 今^ニハ^ニ絶^ニえ^ニよ^ニり^ニ目^ニ見^ニん^ニそ^ニの^ニ海^ニ士^ニの^ニ
 志^ニを^ニあ^ニら^ニぬ^ニ許^ニか^ニし^ニ由^ニき^ニ海^ニ士^ニ衣^ニ敷^ニ島^ニ
 一^ニよ^ニ壽^ニら^ニい^ニて^ニあ^ニら^ニぬ^ニそ^ニの^ニ思^ニひ^ニか^ニら^ニぬ^ニ
 此^ニ浦^ニを^ニい^ニて^ニ漕^ニが^ニ浦^ニの^ニ由^ニか^ニら^ニぬ^ニ物^ニ

早 付

可 書

語り入り ^{シテ} 總一して此浦を阿漕が浦と
申まらん。伊勢古神宮古降臨より此
かた ^古 膳調進 ^古 の網を置く處あり。たゞ
神の古し誓言より ^古 海原 ^古 の入り
く ^古 此處 ^古 の多く ^古 舞 ^古 の ^古 入り ^古 へ
お ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
ひ ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ

網を引く

よ ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
に ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
一 ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
く ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
阿漕を傳 ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
は ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ
罪 ^古 の ^古 入り ^古 の ^古 入り ^古 へ ^古 入り ^古 へ

● 阿漕

ま罪科ツトコを受ウケんや。罪除ツトコの道ミチまへも
 海カミはチまへの名ナのあふ。今イマも阿漕アウ
 うらめや。阿責アセの責セも隙ヒマあつて
 苦ク文モンの復フシ重シある罪ツミ平ヘラをサ給タマふや。
 恥ハぢや。語コトのハあまらハげよ。
 阿漕アウのハ身ミのハ阿漕アウがたハとハ邊ヘリかゝるハまら。
 色イロの錦ニシキ本のハ數カズ積ツミの千チ束ツバの契ケ志シの
 ▲片カタクセ

ぶ身ミの阿漕アウがたハとハ邊ヘリかゝるハまら。
 憲ケン清セイと聞クえ。其ソノ歌ウタ人のハ忍ニび妻メ阿漕アウ
 阿漕アウとハいハひハんハも責セへんハ度タク又マタ重シあ
 るハ悲カナシ一ヒトれ。ロキ地上 打ウ切キぬ。かハかハしハくハ坐イ蓮レンの
 幻マヤカシあハらハ現アれて。執シツ心シンの浦ウラ波ナミの哀アハレも
 りハけるハ値チ遇グあハまハ一ヒト樹ジュの宿ヤドりハも。
 他タ生シの縁縁と聞クもハのハちハ傳ツ身ミも前マエの
 可カ漕ウ

せの値男シテをまごシテ一松蔭シテよシテらシテぢれ
 給入墨衣地上目も夕暮地上の夕煙シテまシテらシテ深
 ふシテかシテたシテやシテ漁シテ火シテのシテ影シテもシテほシテのシテらシテ見
 えシテそシテあシテてシテ海シテ鼻シテもシテ晴シテるシテむシテらシテ霧シテよ
 まシテらシテやシテ手シテ繰シテのシテ網シテのシテ細シテ繰シテらシテくシテ一
 繰シテらシテくシテ一シテ浮シテかシテぬシテはシテむシテとシテ見シテ一シテよりシテも
 俄シテは疾風シテ吹シテきシテ海シテづシテらシテ暗シテくシテかシテまシテ昏シテれてシテ

ちシテおシテいシテ良シテいシテもシテまシテらシテんシテとシテひシテ漁シテのシテ燈シテ消シテえシテ失シテせてシテ
 こシテろシテそシテいシテもシテらシテんシテとシテ叫シテぶシテ聲シテのシテはシテはシテ聞シテえシテらシテ一
 ちシテあシテらシテんシテとシテあシテいシテなシテまシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテ
 あシテいシテなシテまシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテ
待 話
ツヨク
早 上 秋
 法シテの中シテよシテもシテ一シテ葉シテのシテ妙シテあシテいシテたシテのシテひシテもシテと
 まシテらシテんシテとシテあシテいシテなシテまシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテ
 打切 暮の衣のシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテあシテらシテんシテとシテ

らう家よ光の暗から
後シテ海士の
 刈る藻よ棲む中のわれからと音を
 こそはるめせを恨み今宵のまこと
 浪巻れて忠騰の贄の網はまだ
 引かれぬようよも隙ありと夕月
 あら青よりやそ入汐の道や變入
 人目ぞ其のび其のびよく網の沖

地上 法のことゑ 耳より聞けども猶心よ
地上 罪をのみ持網の浪は却つて猛火
地上 とあるぞやあは熱や堪へがたや
地上 猶執心の網置かん 伊勢の海
地上 清き渚のたまぐも 伊勢の海
地上 子も磯子も舟の見とまぞ 唯われのみぞ
地上 あこの海阿漕塩本懲りもせぞ
地上 猶執心の網置かん 伊勢の海
地上 清き渚のたまぐも 伊勢の海
地上 法のことゑ 耳より聞けども猶心よ
地上 罪をのみ持網の浪は却つて猛火
地上 とあるぞやあは熱や堪へがたや

● 上ヨウク
仕舞 打上頭打切

丑みつ過ぐさの夜の夢。丑みつ過ぐさの
夜の夢。目よや因果の廻り来る火
車。業積を敷く。めで目の前の
地獄も真ありげよ。怒ろの氣色や
思よも怨め。古の思よも怨め
古へのゆまの女の名をえり。可漕が此
浦。猶執心の心ひく網の手馴れ

うろくろく今ん却つて。悪魚毒蛇と
つて。蓮。大紅蓮の氷よ身を傷め
骨を砕け。叫ぶ息の焦熱。大焦
熱の焔煙。雲霧起居の隙もあま
冥途の責も。度重ある阿漕が浦の
罪科を助け給へや。旅人よ。助け給へや
旅人よ。また浪よ。入りよけり。また

可漕

浪の底よかきよかき

一編

六

大正十年五月一日印刷
大正十年五月五日發行

觀世流改訂流本
初心者皆宜用



訂正者 丸岡桂

發行者 土居源太郎

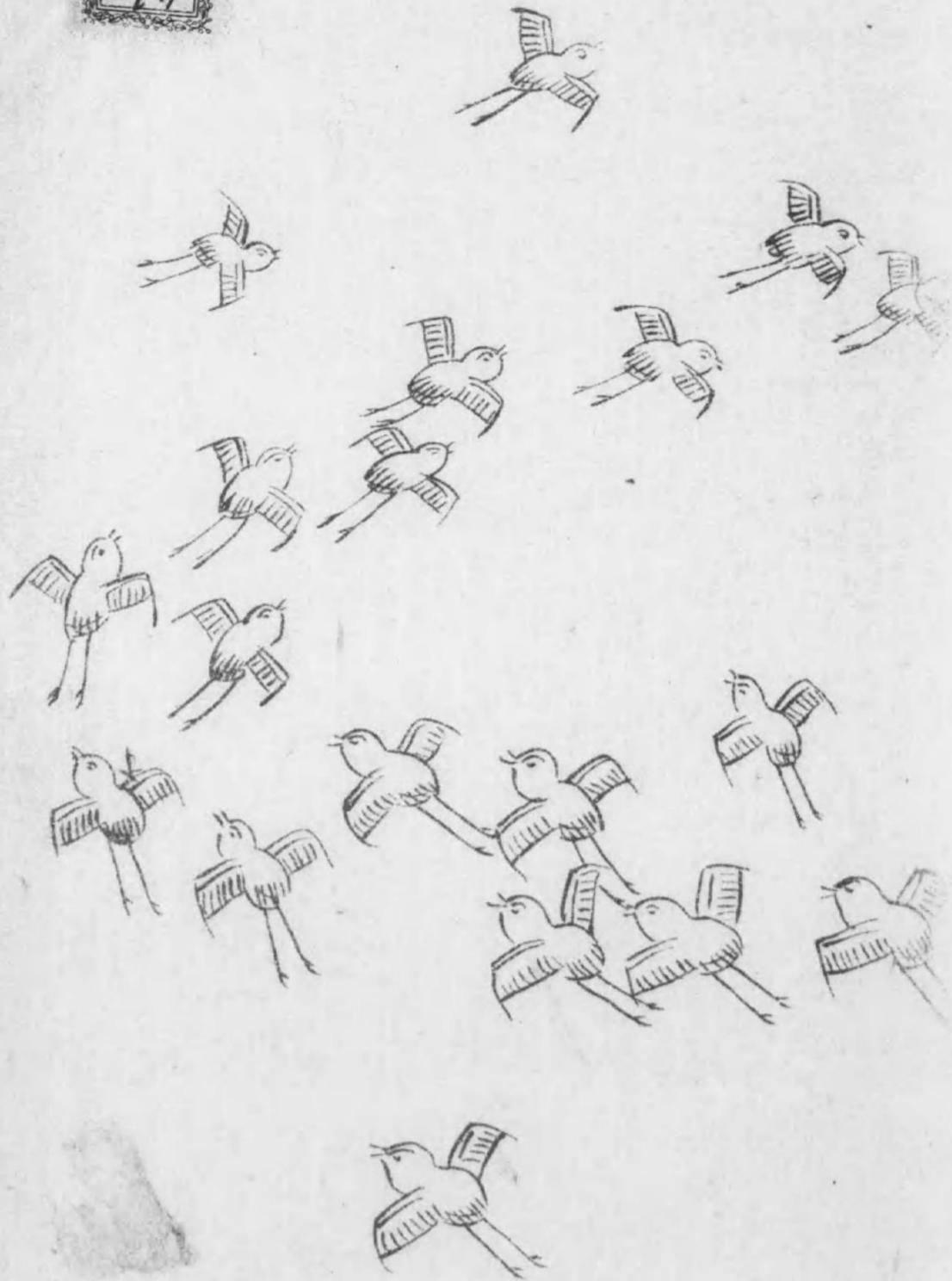
印刷者 鈴木彌作

印刷所 信英堂印刷所

發行所 觀世流改訂本刊行會

電話九段 二三四五番
振替東京 一三四七五番

173
1996



終

